

<保育者の願い>ありやだんご虫を捕まえることに夢中になるが、その後は興味が薄れて世話をする姿は見られない。そんなある日、『女の子が畑に種をまいて毎日水をやり続けると葉と土の間にチラッとみかん色が見える。抜いてみたらにんじんだった』というお話を楽しんだ。幼児たちが目を輝かせて絵本のページをめくる様子を見て、「このワクワク感を体験として味わわせたい!」「にんじんの葉で育つアゲハチョウとの触れ合いも期待できる」と思い実践する。

「植えてみる!」5/10

「何だと思う?」と言い、一人一人の手の平ににんじんの種を乗せていく。幼児たちは「何だか種みたい」と言っている。「本当だ。種みたいだね。何の種だろうね?」と尋ねると、「わかんないよ~」「植えてみれば?」と口々に言う。S児「そうだ、あの絵本みたいに植えるといいんだ」と言う。植えてみることにになり、ワクワクしている。

「水、あげなくちゃ」5/11

登園したM児、「芽、でたかな?」と昨日のプランターの土に顔を近づけて見る。「まだ、でない」とがっかりする。一緒に見ていたA児、「お水、あげなくちゃ」と言い、ジョウロで水をやる。



「おしっこ もらした」5/16 「水、くれすぎなんじゃないの?」5/19

登園すると、プランターに水をやる幼児が増える。すでに誰かが水をあげていることを気にせず水やりをする。そのうちプランターの底から水が流れ出るのを見て、S児「あ~、おしっこもらした~」と言う。その言葉に幼児たちが集まってきて、「どこどこ?」「あ、本当だ」と言い合って、面白そうに笑う。種のためというよりも、プランターの底から流れ出る水が面白くて水をかける幼児が増える。保育者は「種が流れてしまいそう...」と不安に思いながらも、少し様子を見る。今日も「おしっこだ~」と喜んでる幼児たちを見て、M児が「水、くれすぎなんじゃないの?」とつぶやく。保育者は、それを聞き逃さず「Mちゃんが今、何か言ってるよ」と幼児たちに伝える。するとM児は「うちのばあちゃん言ってたよ。こうなるのは、水のくれすぎだって!」と言う。

「芽、出た~!!」5/25 「いっぱい 出た~」5/26

小さな芽が出ているのを見つけて、「芽でた~、芽でた~」と大騒ぎする。S児は、サッと絵本を持ってきて芽が出たところを開いて、見くらべ「もしかして...これ、にんじん?」と首をかしげている。昨日よりも出た芽の数が増え、長さも伸びている。「いっぱい出た~」と大騒ぎ。興奮してまた、もれるほど水をかける。S児は、絵本を持ってきて見比べ「やっぱりにんじんだ」とつぶやく。にんじんだけでなく隣のパンジーや撫子の花にも、水をかけているので、保育者は「おいしくて喜んでるね」と声をかける。

「すご~くおっきいね」6/20 「あれ、この葉っぱ...」6/30

葉がどんどん大きくなり、網状の葉がワサワサと茂っている。S児は絵本と見比べながら、「この次はこうなるよ」と絵本から予想して言う。保育者も絵本を覗き込んで「次はこうなるんだ!」とS児の言葉を認めて繰り返す。M児が園のうさぎのために、家からにんじんを持ってくる。にんじんの葉を見た幼児たちは「あれ、この葉っぱ、同じだ」と気付く。保育者が「同じ?並べてみる?」とプランターの葉と並べる。微妙に色や大きさが違うので「同じ」「違う」と意見が分かれる。保育者は「同じようにも見えるし、違うようにも見えるね」と結論づけずに双方の意見も認める。

「みかん色が見えた」7/7

土からほんの少し見えるみかん色を見つけると「やっぱりにんじんだった~」とはっきり言う。絵本を持ってきて、幼児同士「ほらね」「うん」と見ている。「もう、掘ってもいい?」と待ちきれないように尋ねる。保育者「もう少し大きく育ててカレーパーティーの時にに入れて食べようか?」と言う。

「変な虫」7/12 「葉っぱなくなっちゃった」7/18

にんじんだとわかり幼児たちは、いつ掘るのかを楽しみにしていたが、黒い虫がついているのを見つけ、「なんだ、この虫?」と言う。連休明け、にんじんの葉脈を残して葉がなくなっているのを見つかる。そこには、黄緑と黒のしま模様の大きな幼虫がいた。「この、虫が食べたんだ」と幼児たち。保育者は「この虫の色とってもきれいだね」「だれのあかちゃんかな?」とつぶやいてみる。「白いチョウチョかも」「ちがう。黄色だよ」と幼児たち。「何色だろうね」と保育者も楽しみに待つ気持ちを伝え、降園後、アゲハの図鑑を出しておく。



「くさ~い」8/29

まるまると太った幼虫を見ている時に、偶然W児が大きなくしゃみをした。すると幼虫の頭から黄色い触覚が伸びる。「なんだこれ?」とW児。何度も繰り返し幼虫に向かってくしゃみをする。その度に触覚を出すことを面白がっていたが、そのうちあたりがとても臭くなってきて「う~、くさい~」と大騒ぎになる。

「かたまってる」「ちがうよ、さなぎっていうんだよ」9/1

幼虫がさなぎになっているのを見つけ「かたまった」「ちがうよ、これはさなぎになったの」「今度はちょうちょになるんだよ」と幼児同士で話していたので、アゲハチョウの図鑑を出して一緒に見る。まさに、目の前で見ているのと同じ写真が載っていて「あ、おなじだ」とびっくりしていた。

「きれいだね」9/14 「バイバ~イ、カラスとクモに気をつけてね~」9/15

朝ケースの中でアゲハチョウが1匹羽化していた。幼児が気付くまで待つ。思った通り始めに見つけたY児が次々に友達に伝え幼児たちがケースの周りに集まってくる。羽を広げた様子を「きれいだね」と見ていた飼育ケースの蝶にコスモスの花を摘んできたW児。保育者が蝶の声で「みんなはいいな。お外でいっぱい遊べて」「ここ、なんだかせまい」「広いお空をいっぱい飛んでみたいな」と言う。始めは「家の大きいケース持ってくる?」と言っていた幼児たちも「蝶は空を飛びたい」と感じ逃がす。幼児たちは「バイバ~イ、元気でね。からずには食べられないようにね」「あと、くもにも気を付けてね」と蝶を心配する言葉を投げかけていた。

<考察>

- ・幼児は短期間で変化が見える身近な動植物に、強い関心を示す。にんじんやアゲハチョウなどは、幼児の好奇心や探求心を大いにくすぐることができる最適なものであった。
- ・4歳児はまだ友達関係も希薄であるが、にんじんや幼虫を見るために集まり、お互いに思い思いのことを言い合ったり聞いたりできるよい機会になった。



- ・毎日のように変化していく様子を見たいと思う気持ちが強くなり、よく見ていたので少しの変化であってもすぐに気付いて、友達や保育者に伝えその驚きを共有する心地よさを味わうことができた。
- ・幼児期は自ら関心を持ったことに、五感を使って繰り返し関わることにより様々な気付きや発見ができることがわかった。

### みどころ

4歳児らしく、目の前のものや出来事（様子）に心を動かし「種」「種をまいたプランター」「水が流れる様子」「茂っている葉っぱ」「虫が食べた葉っぱ」「きれいな虫」「見えてきたニンジン」と、具体的な興味の対象が変わったり、自分の一方的な思いでかかわったり判断したりする場面があります。それでも、興味深くよく観たり考えたりするようなきっかけにより、よりよい考えや行動に結びつく気付きをしています。自分から興味をもち感じたり考えたりすることで、生き物とかかわる貴重な経験を重ねることになりました。

また、共通のイメージをもてる絵本があることで、4歳児なりに友達と一緒に栽培しているという意識や見通し、期待感をもつ姿も引き出されています。